

ブルガリア・ルーマニアの旅 2019



2019年11月

旅のチカラ研究所 植木圭二

東ヨーロッパの中でも東の端、ブルガリアとルーマニアに妻と行ってきた。この2国の名前は知っているが、行ったことがあるという人は少ない。それほど観光的に未開な国のために中世ヨーロッパを肌で感じる充実した旅になった。

第一章 旅のはじまり

■なぜ、ブルガリアとルーマニア

今回の旅行目的地はどのように決めたのか。

最近の私は昨年行ったバルト三国や旧ユーゴスラビアの国々の感動が忘れられず、旧社会主義圏の東ヨーロッパの国々に想いを寄せている。この地域は観光開発があまり進んでおらず、それゆえに中世ヨーロッパを存分に感じることができる。

そして私たち夫婦の東ヨーロッパの未踏の国はどこだろうか。

アジアとヨーロッパの境界はトルコのイスタンブールといわれている。イスタンブールは黒海とエーゲ海を繋ぐボスボラス海峡を跨いでおり、交通の要衝で文明の十字路とも呼ばれている。

地図を見ているとイスタンブールよりも西側つまりヨーロッパ側にある2つの国が目にとまった。それがブルガリアとルーマニアで、そんな単純なことで目的地が決まった。

さらに地図をよく見ていくとこの地域は面白そうだと思い始める。ヨーロッパ大陸が地中海に突き出た部分、つまり黒海、エーゲ海、アドリア海に囲まれたこの一帯をバルカン半島と呼んでいるが、バルカン半島はヨーロッパから見るとアジアへの出口になっており、逆にアジアからはヨーロッパに侵出する橋頭堡でもある。さらに北の強国ロシアから見れば地中海への出口になっている。

だからバルカン半島はヨーロッパの火薬庫と呼ばれている。



今回の旅行は個人旅行ではなく、旅行会社のバック・ツアーを利用する。それは観光未開地を短期間で効率的に見て回るには便利で、有名な所には連れて行ってくれるから私のように横着で事前学習を苦手とする人間には大変ありがたい。

しかしながら名所旧跡を見ることだけが必ずしも旅の目的だとは私は思っていない。

最近の私は、旅に行く前にあまり写真や映像を見ないようにしている。

旅には「期待と落胆」がある。過度な期待をして現地に行くと、期待を裏切る結果になることが往々にしてある。それは昨今の撮影技術の進歩により、何の変哲もない風景でも撮り方や見せ方で様変わりしてしまう。そしてそういった映像や情報が世の中には氾濫している。

逆に現地に行ってそこで見たものや体験が予想や期待を超えた時に感動が生まれる。予期せぬことに遭遇した時ほど感動は大きい。それが「偶然と感動」だ。

最近の旅は「期待と落胆」と「偶然と感動」が表裏一体で存在している。

その微妙なバランスを考えながら、最低限の下調べをしてみた。

ブルガリアは薔薇（バラ）の世界的産地であり、「明治ブルガリアヨーグルト♪」と宣伝されているヨーグルトも有名だ。そして世界遺産も注目度、比較的初期に登録されたものが多い。中でもリラの僧院は見逃せない。

ルーマニアは何とんでもドラキュラだろう。それは小説の世界の話なのだが、歴史的に有名な小説の舞台になった地域がどのように現実と共存しているのか面白そうだ。そして 1989 年の社会主義政権の崩壊で大統領夫妻が処刑された国でもある。

■初めてのカタール航空

事前の調査もほどほどに今私はカタール航空でブルガリアに向かっている。私には初体験の航空会社で、たまたま飛行機で隣に座った日本人女性と話をしたら、カタール航空はお勧めのエアラインの一つだという。

彼女は年の頃なら 30 代前半、細身の体だが所作や服装が旅慣れた感じがするので、最初私は一番の CA か添乗員かと思ったが、話をしていくと彼女は若い時にはバックパッカーで世界を旅しており、インドに魅せられてヨガをやるようになったという。たまたま結婚した相手がブルガリア人だったということで 3 年前からブルガリアに住んでいるという。

私はこれ幸いにブルガリアについてあれこれ聞き始める。若い美人が相手だから力が入る。

食べ物は比較的日本人の口に合い、何ととっても安く新鮮だという。人々は社会主義時代の名残もあってかあまりセカセカしておらず、心根の優しい国民性だという。日本のように競争社会や効率の追求に馴染んでおらず、旅行者にとってはかえってありがたいという。そして今の時期は紅葉のピークという情報をもらう。

その彼女お勧めのカタール航空は、燃料費の追加徴収いわゆる燃料サーチャージがない。カタールは産油国なので当たり前と思ったら、他の産油国の航空会社が燃料サーチャージを取っている中、これはありがたい。当然のように旅客運賃は安く抑えられている。

CA の動きや対応は群を抜いている。他の航空会社では食事と食事の間の時間はいわば CA たちの休息の時間で勝手におしゃべりタイムにしているが、この飛行機ではその時間も CA が良く働いていることがとても好印象だ。ドリンクの持ち回りや機内の見回りを積極的にやっている。

そういえば朝食ではコーヒーか紅茶かを聞かれ、私がワインを頼むとワゴンにないのでわざわざ取りに行ってくれる。その対応が実に迅速で、嫌な顔一つしない CA に私は驚きを禁じ得ない。

第二章 ブルガリア

■首都ソフィア

飛行機はブルガリアの首都ソフィアに降り立つ。空港で地元のガイドと落ち合い、私たち一行はチャーターしたバスに乗り込む。ガイドはもちろんブルガリア人で日本語は話せないが、なかなかナイスガイドだ。彼はこれからブルガリアを離れるまで付き合ってくれる。

街は活気がありながらも何となく落ち着きもあり、東南アジアの都市のような雑踏は感じない。ソフィアはブルガリア最大の都市で人口は 124 万人、日本の地方の政令指定都市サイズだ。

ブルガリア最初の観光はバルカン半島最大の教会「アレキサンドル・ネフスキー教会」に行く。といってもバック・ツアーなので、連れて行ってもらうというのが正しい表現だろう。



この教会はブルガリア正教の教会だ。

ヨーロッパの東の地域はギリシャ正教やロシア正教のように各国毎に教会組織がある。西ヨーロッパではカトリック教会としてバチカンに権威が一本化しているのに対して対照的な姿になっている。

教義は同じなのだろうが、私のような観光客にとってカトリックの教会との違いといえば十字架が縦長ではなく真四角に近く、教会内には椅子が置いていないことくらいだろう。

この教会も椅子がないために教会内は広く感じる。バルカン半島最大ということで 1500 人も収容できるという。

ロト戦争というのがあった。といっても、宝くじとは関係ない。

露（ロシア）と土（トルコ）の戦争なので露土戦争と書く。昔からロシアとトルコは仲が悪かった。そのつばぜり合いの場所がこのバルカン半島だ。

ブルガリアは 1396 年にオスマン帝国（オスマントルコ）に制服されて 500 年近くその支配下にあった。そのオスマン帝国とロシアが戦ってオスマン帝国が敗れたのでブルガリアが独立できた。その恩義があって犠牲になったロシア兵に対する慰霊を込めてこの教会が建てられた。

■ブルガリアの歴史

ブルガリアの歴史は古い。世界の四大文明に匹敵するくらい古く、この地に紀元前 3000 年頃にはトラキア人が黄金文明を築いていた。

その後ローマ帝国に支配され、ローマ帝国が東西に分裂して、コンスタンチ・ノーブル（現在のイスタンブール）を首都とする東ローマ帝国（ビザンツ帝国）の支配に代わる。

その後 681 年にブルガール人が建国した第一次ブルガリア帝国はバルカン半島のほぼ全域を支配する国家になり現ブルガリアの基礎を築いた。しかし 1018 年にビザンツ帝国に滅ぼされる。

そして 1187 年に第二次ブルガリア帝国が建国されるが、この国も約 200 年後にオスマン帝国

に滅ぼされ、以降約 500 年間イスラム教国家であるオスマン帝国に支配される。オスマン帝国はイスタンブールを首都とする国で、現在のトルコ共和国の前身にあたる。

つまりブルガリアの歴史はイスタンブールとの戦いの歴史になっている。

それを解放したのがロト戦争で、以降はロシアの影響下に入る。しかしナチス・ドイツの台頭で第二次世界大戦では日独伊三国同盟の枢軸国側につく。大戦末期にソビエト連邦から侵略され、戦後は東ヨーロッパの他の国々同様に社会主義国として歩み始める。ソビエト連邦崩壊により民主化されて、以降 NATO や EU に加盟して現在に至っている。

■ソフィアを歩く

ソフィアは首都なので大統領官邸があり、入口の前に立つ衛兵の交替がある。

普通こういうところに立つ衛兵は身長や容姿で選ばれたエリートのはずだが、ここの衛兵たちはちょっと様子が違いあまり恰好よくない。ガイドの話ではこの衛兵たちはボランティアだという。どおりでと思ったが、今度はボランティアにしては恰好いいなどと思ってしまう。物事の判断基準が定まっていないことに気が付く。

ブルガリアの歴史は古く、そして複雑である。だから様々な遺跡や建物がある。

大統領官邸の裏手にローマ時代の遺跡がある。ローマと言えばテルマエつまり風呂で、ガイドの指差す方向には風呂場の跡がある。

ローマ遺跡の奥には丸い円柱状の「ゲオルギ教会」がある。4 世紀にできたというソフィアに現存する最古の建物で、ローマ時代のものだ。このような形状が教会の初期のスタイルということで、ガイドはこの円柱状の教会は世界中ほとんど残っていないと言っている。

確か私も同様な形状の教会をクロアチアのザダルで見たが、9 世紀のものだったことを思い出す。それよりもさらに 500 年も古いのか、ガイドが誇らしく話すのが理解できる。



道路を挟んで地下鉄の駅があり、駅の中にもローマ時代の遺跡がある。その直ぐ近くにローマ遺跡に埋もれるように小さな「ペトカ地下教会」がある。オスマン帝国支配下でキリスト教の信仰を守るために地下にひっそりと建てたというブルガリア正教の教会だ。

地下鉄の駅の先にはイスラム教のモスク、カトリックの教会、コダヤ教の教会など多種多様な歴史がここに集まっている。

街のあちこちには八百屋があつて、飛行機で隣に座った彼女が言うように新鮮な果物や野菜が大量に店頭で並んでいる。どれも量り売りになっていて価格は日本の 1/10 程度だろうか。食料品についてはこの国の物価は非常に安い。

2 階建てのホールのような大きな市場に行く。シンプルで綺麗な市場だが、あまり人がいないのは地元の人々よりも観光客相手なのだろうか。

いや、そうではない。むしろ社会主義政権時代はこの市場がメインで、自由主義経済化が始まって街に八百屋が出たのだから。だから市民は街の八百屋で野菜を買うのだから。



その後もいくつか教会を訪問する。ブルガリア正教なのに椅子のある教会があり、ガイドに理由を尋ねると思いがけない答えが返ってくる。「ブルガリアは急速に少子高齢化が進んでおり、高齢者のために椅子が置いている」という。詳しく聞くとブルガリアの女性が一生の間に生む子どもの数は 0.8 人、少子高齢化の最右翼と思っている日本でさえも 1.43 人だからこれは相当に低い。

■最初の晩餐

ブルガリア最初の夜、最後の晩餐ならぬ最初の晩餐が始まる。

彼らの旅行歴がすごい、本当にたくさんの国に行っている。やはりブルガリアやルーマニアに来る人たちは、ヨーロッパ各国を歩き尽くしたので最後に残った地域に来ているようだ。他のお客に聞いても同じような人たちばかりである。

相席したある人は若い頃には一人で世界を旅していたという強者で、それを裏付けるように旅行ガイドブック「地球の歩き方」への投稿ではなく、向こうから取材にきたというから凄い。

彼から聞いた若い頃にトルコに行った時の話が面白い。

トルコ人と仲良くなり、そのトルコ人の家に招かれた。家には一枚の写真が飾ってありその写真の人物を指差して「この日本人には感謝している、何しろロシアを打ち負かしてくれた」と感謝の意を表していたという。

その写真は明治天皇で、言わずと知れた日露戦争を勝利した時の天皇だ。彼もこれには驚いたという。敵の敵は味方という論理だろうが、明治天皇がこんな形で敬われていようとは戦争とは奥深い。そしてトルコが親日国だという理由の一つが分かった。

さて晚餐での料理は、驚くほど大きなパンがテーブルの真ん中のカゴに入っており、出てくる野菜サラダもボリュームたっぷりメインのポークステーキは少し硬いが分厚くて大きい。味も比較的あっさりとしており日本人好みだろう。

飲み物で、アイリヤンと呼ばれる飲むヨーグルトを妻が注文する。ヨーグルトの本場でお洒落なコップに入っており出てくるが、ややしょっぱい味であっさり系の料理との相性が良い。

地元の伝統的な酒、ラキアがある。ブドウやスモモの蒸留酒でアルコール度は45%と高い。私が注文するとそれを聞きつけてあのナイスガイのガイドが寄って来て何か話してくる、「お前は度胸がある」とでも言っているのだろう。そしてラキアを飲むがウイスキーとあまり変わらない。

ビールを注文すると、グラスの51CL（センチ・リットル）と書かれたラインまでしっかりと注がれている。この国でも法律でビールの量を規定しているのだろうか。ドイツはビール文化を守るために原料だけではなく提供する量まで法律で定めている。そのことを同席の人たちに伝えると慌てて写真を撮り始めるが、既に一口飲んだ後で目盛りを下回っている。

ビールの価格も安い。51CLの生ビールは約300円、レストラン価格を考慮すると日本の半額程度で、スーパーマーケットに行くとロング缶は約70円で売っている。

■ブルガリアはヨーグルト

私が調べた範囲ではヨーグルトは質も量も充分で満足できるという。私たちが泊まっている高級ホテルでは、4種類のヨーグルトが大きな容器に入っており、トッピングも豊富だ。

そしてまた昼食のレストランでは前菜に出てきた冷たいスープ状のヨーグルトに細かく刻んだキュウリが入っているという変わったもので、ガイドブックで調べると「タラトール」という名物料理らしい。（写真右）



タラトールは少し塩味の付いた独特の味をしているが、これが結構いける。

山形の名物料理で夏野菜や漬物を細かく刻んだ「ダシ」があるが、それをヨーグルトに入れたような感じだ。あるいは宮崎の「冷や汁」を味噌ではなくヨーグルトにしたような料理だ。

ということはブルガリアにおけるヨーグルトとは、日本における味噌のようなものかもしれない。ブルガリア人にとって食卓になくってはならないものなのだろう。

■リラの僧院

ソフィアから南へ 50km くらい行くとリラの僧院がある。1983 年に世界遺産に登録されたブルガリア正教の総本山で、白と黒のゼブラ模様が特徴的でブルガリアを紹介するパンフレットには必ずこの建物が出てくる。

オスマン帝国が支配していた時代にイスラム教のモスクに改修・改宗させようとしたが、地元で根付いて大きく事業を展開していた大規模僧院なので、そのままにして税金を収めさせた方が得策だということでイスラム化から免れた。

そういう時代なので僧院といっても要塞のような造りをしており、高い壁に囲まれた大きな門から中庭に入ると大聖堂が真ん中にある。高い壁は中庭からみると 4 階建ての宿泊用の施設で、これらの建物だけでもなかなか素晴らしい。



大聖堂の最大の特徴は建物の内外に描かれているフレスコ画と呼ばれている宗教画で、これが本当に素晴らしい。

フレスコという技法で描かれており、それは壁などに漆喰（しっくい）を塗って乾かないうちに顔料で描き、乾くとともに顔料がしっかり定着するというものだ。

大聖堂の中のフレスコ画は量も質も実に見事だが、残念ながら大聖堂内部の撮影が禁止されており写真は撮れない。ただこれは写真に撮っても、現物を見ないとその感動は絶対に伝わってこないだろう。暗い空間に宗教画が浮き出るように見事な色彩で描かれている様はまさに感動的な空間で、遥かブルガリアにまで来た甲斐があるというものだ。

写真を撮ることができる建物の外のフレスコ画だけでも相当に感動的である。



大聖堂の中央に「最後の晩餐」が描かれている。それはキリストが処刑される前夜に弟子たちと共にとった夕食会のことでパンとワインをキリスト自身の肉と血として、また裏切り者が出ることをこの時に予言したと新約聖書に書かれている。

最後の晩餐はレオナルド・ダ・ビンチが描いた壁画があまりにも有名だが、世の中には様々な最後の晩餐を描いた絵画が存在することを、私は遅ればせながら気が付くことになる。

ここリラの僧院に描かれている最後の晩餐は、キリストが弟子たちを集めて大きな丸テーブルを囲んで座っている。

それに対してレオナルド・ダ・ビンチのものは横長のテーブルに全員がこちらを向いて座っている。よくよく考えるとそう座っているのは明らかに不自然で、丸いテーブルを囲んで顔を見合わせながら座っている方がはるかに自然だ。

私はレオナルド・ダ・ビンチを尊敬するあまりそんなことも気が付かずにあの壁画を見ていたことになる。

ただ彼は遠近法、明暗法などの科学を駆使して、それまでと全く違った視点から新しい芸術を生み出した。だから後世になって最後の晩餐がキリスト教徒でもない人たちにまで知れ渡った。

■ボヤナ教会

ソフィア中心部に近い場所に「ボヤナ教会」という小さな教会がある。ここは 1979 年に世界遺産登録された。リラの僧院の登録よりも 4 年早い。

なぜ私が世界遺産の登録年にこだわるかというと、世界遺産の最初の登録は 1978 年でガラパゴス諸島やイエローストーンなど世界 12 カ所が登録された。それ以降登録数が年々増え続け 2019 年現在では 1121 件にもなっている。個人的感想を言えば、昨今は粗製乱造だろう。



だから 1979 年登録というはかなり厳選された世界遺産ということになる。

ちなみに日本にある世界遺産の登録第一号は 1993 年でかなり遅い。その時に法隆寺、屋久島、姫路城、白神山地の 4 カ所が同時登録された。

この教会のフレスコ画がなぜ厳選された世界遺産なのかというと、それまでの宗教画では人物の表情や動きは全く表現されておらず、そのような変化はルネッサンスで始まったというのが通説である。ところがここのフレスコ画はルネッサンスが始まる半世紀前に描かれたということが価値のあるところだとガイドは誇らしげに言っている。

とにかく壁や天井いっぱいにはフレスコ画が描かれている。残念ながらここも写真撮影が禁止されている。それだけではなく温度・湿度を一定に保つために見学時間は 10 分間、同時に中に入ることが許されるのは最大 8 人までになっている。

ここにも最後の晩餐がある。こちらは半円形のテーブルの弧の部分にこちらを向いて全員が座っている。驚くべきことは裏切り者のユダは既に殺されているように見える。予言しただけのはずなのに、何と気が早い。さらにテーブルには玉ネギ、ニンニク、カブが置かれている。これもワインとパンで決まりと思いきやで、またしても意表を突かれる。

この教会は 11 世紀に造られて 13 世紀と 19 世紀に増築されたので全部で 3 つの部分からなっており、増築の時に古い壁画の上に壁を上塗りして同じ画を描いている。

所どころ上塗りした部分がはがれ落ちていて古い画が露出している。その感じがまた良い。

小さな教会ながら見るべきものが非常に奥深い。さすがに 1979 年組は違う。

付け加えると私が大学を卒業し定年まで勤めた会社に入ったのが 1979 年で、同じ 1979 年組なので偶然でも嬉しい。

■ちょっと違うツアー客たち

最初の晩餐でも触れたが、このツアーの参加者は今まで私が経験してきたツアー客とはちょっと違う。それは旅のベテランが多いということで、みんな海外旅行慣れして世界各地に行った経験が豊富だ。参加者たちと話をするとイスラエル、ボリビア、マルタなど海外旅行初心者には馴染みがない国名が出てくる。ヨーロッパ各国にはおおよそ行ってしまっている。

そんなことも要因かもしれないが、一人参加の旅行者が非常に多いのも特徴だ。参加者は全部で 29 人、それを大きく分けると 1/3 が夫婦、1/3 が女性の 2 人連れ、残りの 1/3 が 1 人参加になる。その 1 人参加の中で男性客が 5 人いる。私が経験してきたツアーでは初めての状況だ。

興味深い人の話を聞くことができた。その人は若い頃から海外や国内各地を旅していたが、ひよんなことで20代後半に紙芝居に出会い、面白そうだから紙芝居屋で身を立てることを選んだという。理由は、人と違うことやりたいのと紙芝居屋には自由時間が多いと思ったからだという。

紙芝居で身を立てるようになってからも旅行を続け、結婚もした。

私が気になっていた収入を聞いたところ、一人一回100円の代金をもらい1日に300人くらいの人に見てもらえるというから1日3万円くらい稼げる。そして彼は3人の子供を大学まで出したと胸を張って答えてくれた。

紙芝居屋は目論見通り時間が自由になる。旅はもちろん、山が好きでヒマラヤを中心に相当に歩いたという。

好きなことをやるというのは、心も開放してくれるのだろう。悟りを開いたような話し方や表情が印象的だった。

■3つの丘の街

ブルガリアのほぼ中央にトラキア平原という農業地帯があり、その中心にあるブルガリア第二の都市プロブディフに私たちは来ている。

紀元前にローマ人がここに来た時に3つの丘の街と名付けたというくらい丘が特徴的な街だ。

日本でも丘は、つまり山の手で高級住宅地が多い。この街も丘の周辺や中腹は高級住宅地になっており、大きな屋敷があって石畳の道が整備されている。

紅葉が綺麗な季節なので街路樹や屋敷の中の木々は黄色に色づいて、それに加えて秋の日差しが石畳を銀色に輝かせている。



丘の上に登ると街が一望できる。この眺望もまた素晴らしい。

住宅地の中に半円形のローマ時代の劇場跡が突如として現れる。ガイドの話では現在も野外劇やコンサートなどが催されているというから、正確には「跡」ではない。この夏にここで行われたミュージカルの動画をスマホで見せてくれた。なかなかタイムリーな心遣いに感心する。

この街にはローマ時代の遺跡が非常に多く残っている。

私たちの昼食会場のレストランが洒落ていてローマ遺跡の上に建てられたら貴族の宮殿を改装してレストランにしたもので、入り口の壁画が見事で立派な中庭やホールもある。

案内された場所は少し暗い洞窟のような部屋で、木の床のきしみ音を聞きながらテーブルに着くと、ウェイターがテーブルの真ん中に 1 本あるローソクに灯をともしてくれる。テーブルが置かれている床の端には手摺りが設けてあって、その手摺りのすぐ向こうにはローマ時代の遺跡がライトアップされているという驚きの空間だ。

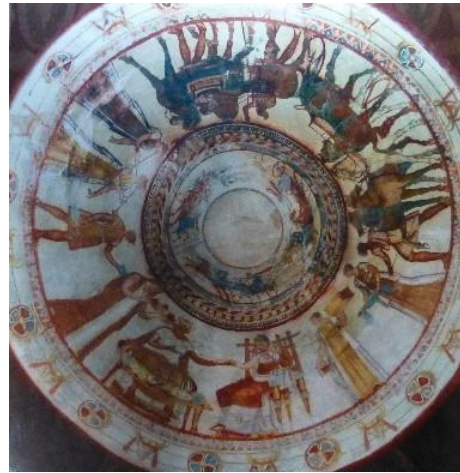
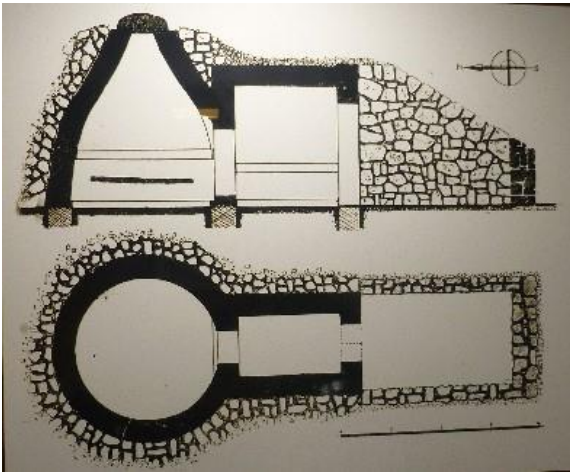
そしてまた大きなパンが出てきた。もちろん料理の味も良い。

■カザンラク

プロブディフの北東でトラキア平原の端にあるカザンラクを訪れる。ここには世界遺産のトラキア人の墳墓がある。そしてここも 1979 年組である。

残念ながら劣化防止で本物は公開されておらず、墳墓全体を本物そっくりに再現したレプリカがそれらしく公開されている。

紀元前 3~4 世紀という壁画にはガイドの説明では葬儀の光景が描写されており、当時の風習では夫が亡くなると妻も殉死したという。その言葉に女性客から「エー！」と驚きの大きな声がある。「冗談じゃないわよ」という言葉も聞こえてきそうな空気が流れる。



左の写真は墳墓の構造で、丸いのが玄室で天井に丸い壁画が描かれている。右の写真はその天井に描かれた壁画で、レプリカではない本物を写真に撮ったものを私がまた写真に撮った。

カザンラクはブルガリアの有力産業であるバラの栽培の中心地になっている。毎年 6 月にはバラ祭りが 3 日間かけて盛大に開催される。市内にはバラ博物館まである。

バラ製品の販売店を訪れる。バラのジャム、クリーム、石鹸、香水に女性陣が群がり、飛ぶように売れていく。

バラの花言葉は「愛」が一般的だが、花びらの色別の花言葉が面白い。赤系統の色はほぼその花言葉に沿っているが、黄色のバラは要注意かも知れない。バラを贈る時にはそのことを注意しないとイケない。

帯紅は「私を射止めて！」
赤は「愛情」「情熱」
ピンクは「上品」「愛を持つ」
白は「私はあなたにふさわしい」「純潔」
黄色は「嫉妬」「不貞」

私たちを乗せたバスは次の目的地を目指して走っている。そして延々と田舎道が続く。

鮮やかな緑の低木の畑が道の遠くに数多く見ることになる。ガイドの話ではバラの畑で、排気ガスの影響を受けにくいように郊外の道路から遠いところで栽培するという。

山も道端の木々も紅葉している。ただし赤は少なく紅葉というよりも黄葉だ。

古い家並みはレンガづくりで屋根には瓦が乗っている。それが所どころ崩れているので廃墟の街かと思いきや地元の人だろう馬車のような乗り物に乗って荷物を運んでいる。よく見ると馬ではなくロバラしい、ロバに荷車を引かせている。そんなのどかな光景が続く。

■古都ヴェリコ・タルノヴォ

ブルガリア北部の古都ヴェリコ・タルノヴォは人口 9 万人の小さな街だが、かつては第二次ブルガリア帝国の首都だった。

山間の溪流沿いの街で、ヤントラ川が蛇行する部分を活かした狭い土地に建物が建っている。その斜面にある街並みが独特の景観をつくっている。



職人街と呼ばれる土産物屋の通りが 300m ほど続いている。恐らく昔は彫金や木彫りなどの職人の店だったのであろう。その狭い部分に職人街の他にホテルやレストランも集中しており、私たちは歩いて散策しながら夕食のレストランに行く。



たどり着いたレストランがどうしてなかなか素晴らしい。

カウンターにピザ焼きの窯があり、私たちが来店すると生地をこねて伸ばしてトッピングをして窯に入れている。きっとピザが焼き上がるのだらうと注文したビールを飲みながら見ているとピザではなくフォッカチオで、それらが各テーブルに運ばれてくる。

やはり焼きたては柔らかく、香ばしく、そしてうまい。サラダとともに食べると塩気が効いていてトッピングに使ったバターの味も活かしている。もちろんビールにも良く合う。

メイン料理は「ギョヴェチェ」という壺焼き料理で、壺で鳥肉を煮込んだので熱と味付けがゆっくりと浸透して鳥肉がとろけるほどに柔らかく見事な味付けに仕上がっている。同席のツアー客たちも感激している。味だけではなく見た目も雰囲気も満足感と満腹感タップリの夕食になる。

満足感と満腹感を保ちながらホテルまで街を散策しながら歩く。

到着したホテルのロビーには、相撲取りの琴欧州の若い頃の写真が飾ってある。この街は琴欧州の出身地としても有名だ。

翌朝、街を一望できる城壁の見える丘に案内されてやってくる。

その景色があまりに感動的で、丘の上に建った要塞が朝日をあびて輝いており、反対側には旧市街の街並みが見える。360度のパノラマの風景をみんな忙しく写真に撮っている。

ツアー客のひとりが「中世がこんなに残っているのは凄い、日本では考えられないよ」とつぶやく。

旅人がここに立つだけで、古（いにしえ）の都がその旅人たちを中世ヨーロッパに運んでくれているのだとを感じる。私はこの感覚、この感動のためにわざわざヨーロッパの東の端の国にやって来ているのだと感じ始める。



■岩窟教会

ヴェリコ・タルノヴォからさらに北上しルーマニアとの国境近くにある「イワノボの岩窟教会」に行く。ここも 1979 年に世界遺産登録された、私と同期組だ。

紅葉している木々の間には細い登山道があり、岩山なので結構急な斜面に簡単な階段が造られ、100m程登ると岩山の中腹の岩壁をくり抜いて作られた教会がある。

その造りは小豆島の山岳霊場か、あるいは房総半島の鋸山のような。洋の東西を問わずこういった山岳信仰が初期の信仰の姿なのだろう。

教会の天井や壁には多くのフレスコ画が描かれている。写真撮影も禁止されておらず開放的なことはありがたいが、保存のことを考えるとかえって心配してしまう。

ここにも最後の晩餐が描かれている。テーブルは半円形で半円の弧の部分にキリストがこちらを向いて座り、弟子たちの半分はキリストの両隣でこちらを向いているが、残りの半分は背を向けてキリストに対峙して座っている。



■ブルガリアを後に

間もなくブルガリアを離れるので勉強熱心なガイドにバスの車内で質問をする。

私が聞いたのは日本では6・3・3制の教育システムだが、ブルガリアはどうなっているのか。

彼の回答は、ブルガリアは7・5制で合計12年は日本と同じだが、日本との違いはそこまでの12年間は義務教育なので授業料はかからない。やはり社会主義の仕組みが残っているのだろう。そして大学への進学率は11%という。そんな数字を即座に答えるガイドの職業意識に敬服する。

次に日本の印象を聞くと、難しい質問だと言いながらも3つ答えてくれる。

その3つとは、日本人はみな時間にとっても正確だということ。そして自動車、電機、建築など様々な産業が世界的レベルにあるということ。最後にいろいろなスポーツが盛んだと言っている。その証拠に羽生結弦や錦織圭といった名前がスラスラ出てくる。よく勉強している。

それにひきかえ、恥ずかしながら私が今回の旅の下調べをする前に知っていたブルガリアはヨーグルトと琴欧州だけだった。

第三章 ルーマニア

■ルーマニア入国

ブルガリアとルーマニアの国境は多くの部分はドナウ川である。国境越えはドナウ川の両岸の検問所で行われるが、当然のように出国するブルガリアの審査は緩いが、入国するルーマニアの審査は厳しい。



ルーマニアへの入国審査で、私たちのバスの前のトラックは積み荷をナイフで切り裂かれ、開けられている。そしてナイフで切った部分を検査官がガムテープを貼って応急処置をして通過する。それを見ていた乗客たちは自分たちの荷物も同じように切り裂かれ開けられるかと車内に緊張が走る。残念ながらそういった光景は写真に撮ると罰せられるのでカメラさえ向けられない。

そして私たちの順番になる。検査官がバスに乗り込んで来て全員のパスポートを集めて事務所に持ち帰る。15分程してパスポートが戻り入国許可が下りる。車内には安堵の声が漏れる。もちろん荷物の切り裂きは無かった。

この地域の国境越えは検査官の胸三寸で決まること多く、さらに通過しようとする人のパスポートによっても大きく変わる。日本のパスポートは世界最強といわれており、ビザ（査証）無しで入国できる国の数が180カ国で世界1位だ。ただこの有難味を実感している人は意外に少ない。

ルーマニアに入ってから何となく工場やアパートが近代的になった感じがする。そんなことを車窓から景色を見ながら考えているとバスが急にスピードをゆるめ始め、やがて渋滞に突入する。バスは停まったり徐行したりのノロノロ運転を繰り返している。

そして原因が10分程で分かった。それは信号機のない十字路で、私たちのバスが走っている道には一時停止の標識があるので、なかなか前進できないでいた。

そういえば、ブルガリアでもそうだったが道路にはほとんど信号機がない。それは大きな道路が交差するところは十字路ではなくロータリーになっているからだ。信号機がないので歩行者の横断は車が来ない時を狙って横断するか、運転手とのアイコンタクトになる。

本当に信号機がない。それに気がついてルーマニアの首都ブカレストから本日宿泊するブラショフの市街地までの150kmの道のりを観察していたが信号機は1台も無かった。途中には小さな街や田舎の集落もあり、高速道路も一般道路もあるのに驚きの交通システムになっている。

改めて信号機の功罪を考えたい。

信号機があることによって良いところは、信号機という無味乾燥の機械によって通行の権利が与えられ交通事故が少なくなることだろう。

反対に信号機がないことによって無用の停止時間が無くなり、停止・発進が少なくなり交通渋滞も減り、結果として車の燃費も向上する。しかし何よりもこの信号機無しシステムは譲り合いの精神の上に成り立っている。

それはあまり競争心のない旧社会主義国だから成り立っているのではないだろうか。競争を前提とした現代の日本社会で果たして可能なのだろうか。なかなか奥が深い。

■ルーマニアの夜

ルーマニアでの最初の晚餐はブラショフにある蒲鉾型の天井を持つレストランで、その空間を利用して生演奏をやっている。生演奏に合わせてルーマニアの民族衣装を着て歌う歌手、そしてその歌に合わせて踊るお客、人々は和気あいあいに週末を楽しんでいる。

バルカン半島の名物料理ムスカが出てくる。ムスカは簡単に言うとジャガイモで挽き肉を挟みソースで煮込んだもので味も食感も日本人には評判がよい。そして私もこの味に覚えがある。

私は妻に「ムスカは、どこかで食べたことがあるよね？」と尋ねると、一呼吸おいて妻からは「ギリシャのサントリーニ島でカメラを落下させ壊した時に食べていた料理よ」と返ってくる。

こんなところでそれをいうか、嫌な思い出が蘇ってくる。それにしても妻の記憶力は凄い。

レストランを出ると夜の 10 時を回っているのに街には人が多く出ている。今日は土曜日の夜だからだろうか。

それだけではないらしい。北半球のサマータイム実施国では 10 月の最終土曜日の夜から日曜日
に変わる時にサマータイムを通常の時間に戻すことになっている。明日の日曜日から朝が 1 時間
遅くなるので、本日は特別に夜遊びをしているのだろう。

私にとっては海外旅行中にサマータイム変更のその日を体験するのは初めてになる。

■ ルーマニアは朝から非日常

ルーマニア最初の朝食は、ブラショフのホテルの朝食だが驚きの内容だ。

ビュッフェスタイルの普通の朝食かと思いきや、ちょっと珍しいものがある。それはネギだ。
形も大きさも日本の深谷ネギのようで、こんなものが生で丸ごととでていることに驚くが、ナイ
フで刻んでオリーブオイルを垂らしてケチャップを付けて食べると結構いける。

そして更に驚くことはスパークリングワインが大きなアイスペールに入っている。私も
いろいろな国のホテルに泊まって朝食をとっているが、こんなことは初体験である。

早速朝からスパークリングワインを 2 杯頂く。私が飲んでいると他の日本人旅行者も相次いで
飲み始める。その結果ワインボトル 4 本が簡単に開いてしまった。さすがにその後はアイスペ
ールごと撤去される。日本人への印象がやや気になるが、非日常を存分に楽しんだ。

ここブラショフはドーナツ発祥の地というから、朝食にもたくさんのドーナツが置かれて
いる。私は素通りをするが、女性陣は群がっている。彼女たちにとってはこれも非日常だろう。

■ ドイツ人が造った街

ほろ酔い気分になりながら、シギショアラという小さな要塞都市にやって来る。

街の中心には 14 世紀にできたという時計塔があり、絡繰り時計になっているというので私たち
はその絡繰りがどのように動くのか期待して 12 時になるのを待っている。

しかしその期待は見事に外れて一体の人形が鐘をならすだけに終わる。

14 世紀ならばそんなものだろうと納得しつつも、やはりこれも「期待と落胆」か。

その時計塔に登ると街が一望できる。中世ヨーロッパの都市には街が一望できる鐘楼や塔が街
の中心に必ずあり、それはまた街のどこにいてもその塔を見ることができる。



時計塔からは街の様子や、人々の動きもつぶさに見ることができる。

そんな人々を見下ろしながら考えることは、見下ろすということはこの時計塔のように人々からも常に見られているということである。それは組織のトップに立つ人、社長や政治家たちも同じで見下ろしているつもりが実は常に多く人に見られているということになる。どこかの国の政治家もこれらの塔に登り、それを感じて欲しいなどと考えてしまう。この国の独裁政権だった大統領もしかりだ。

この街はドイツ人が造ったというのでシェーンブルグというドイツ語の名前も付いている。ここからドイツまでかなり離れているのに、いつもながらドイツの存在感を強く感じる。

街の中心部にはドイツ人が住み、その周辺にルーマニア人が住み着いた。だから中心部にある教会はドイツ人のためのプロテスタントの教会で、街外れにルーマニア正教の教会がある。

ここも世界遺産で、登録は 1999 年である。

■吸血鬼ドラキュラ

ルーマニアと言えばドラキュラが有名だ。アイルランド人の作家ブラム・ストーカーが 1897 年に書いた小説「吸血鬼ドラキュラ」の吸血鬼である。モデルは中世ルーマニア南部に住んでいたヴラド 3 世とされており、ドラキュラという名前はヴラド 3 世のニックネームだという。

ドラキュラとヴラド 3 世が結びつくはそれだけで、その他は作者が創造したフィクションだ。ヴラド 3 世が実在したのは 15 世紀だが、小説の舞台は 19 世紀になっている。

ドラキュラ伯爵と呼ばれることがあるがルーマニアには伯爵という称号はなく、原作でも伯爵は使われていない。ドラキュラは映画化、舞台化によってその都度原作が脚色され、結果としてイメージが先行している部分が多い。だから原作を理解している人は少ない。

原作ではドラキュラは「背の高い痩せた男、燃えるような赤い目、牙のような歯」と表現されているが、最初は白髪で口髭を生やした老人で、人の生き血を吸って若返り、髭を剃り髪も黒くなっていく。

活動は日没から日の出までで、夜が明けるとともに城に設けている石棺の中で横たわっている。怪力で変幻自在、コウモリやネズミ、狼などの動物を操ることができ、影が無く、鏡には映らない。十字架とニンニクを嫌い、他人の家にはその家の人に招かれなければ入ることができないが、一度招かれると以後自由に出入りできるというユニークな設定になっている。

物語はドラキュラがより多くの生き血を吸うために大勢の人間が住むロンドンに屋敷を買おうと計画したことから始まる。ルーマニアからロンドン移住を企むドラキュラと、その正体を知って倒そうとする人間との戦いが書かれている。

これを機会に私もこの小説を読みたい気持ちになる。ただこの小説は全て日記や手紙、新聞記事等により全て 3 人称で語られる難解な構成になっているという。

■ドラキュラのレストラン

私が登った時計塔の近くにドラキュラのモデルになったヴラド3世の生家があり、今はレストランをやっている。嬉しいことにそのレストランで昼食になる。

料理はドラキュラにちなんだ血のようなワインやコウモリの肉とか出てくると半分期待しながらも平凡な料理が出てくる。ただし日本人好みの味でうまい。

レストランの中にドラキュラの部屋というがあり、食事の待ち時間を利用して行って見ると簡単なお化け屋敷とでもいうもので、ドラキュラが寝ている棺が置かれている。私たち夫婦が入ると棺で寝ていたドラキュラが急に起き上がり、驚かしてくる。

そして食事を終えてレストランを出たところでハプニングが発生する。

妻が帽子とイヤホンガイドを忘れてきたと言う。すぐに戻って忘れ物探しに食事をしたテーブル付近やトイレを探す。

最初は簡単に見つかると思っていたが、ちょっとした騒動になり始める。いつの間にか添乗員も巻き込んでの大捜索になっている。

そしてドラキュラの部屋にも再度入る。添乗員も一緒だ。

当然、寝ていたドラキュラが起きあがるが、私たちはそれを無視してライトを照らして床の隅などの捜索を続けている。

すると起きあがったドラキュラも異様な雰囲気を感じ取ったか、「Problem (何か問題でも)?」と喋ってきた。

驚いたのは一緒に探してくれた若い女性添乗員で「ドラキュラがしゃべった〜!」と目を丸くしている。

しばらくは腰を抜かしていたようだったが、それでもさすがに彼女は落ち着きを取り戻して「We are looking for lost items (忘れ物を探している)」と答える。

ドラキュラは「Ask at the reception (受付で聞いてみて)」と言っている。

そんなやり取りを横目に、妻が忘れ物を見つけて一件落着に至る。

バスに乗りこみ、添乗員の話は「ドラキュラがしゃべった。それも Problem? と言った」で、大変に盛り上がっている。この話はきっと彼女の持ちネタになるのだろう。



■ブラン城

ブラン城はドラキュラのイメージに近い城で、実在したヴラド3世の祖父の居城だったのであながち無関係ではない。



城は4層構造で内部の階段は狭く入り組んでおり、脱出用の秘密の通路もある。城の外部は絶壁になっておりいかにも戦闘的な要塞だ。

それに比べて城の中庭には井戸もあり、中庭を四方から見下ろすように回廊がある。部屋数は30くらいあるだろうか、どの部屋も調度品や暖炉などあり優雅な生活を感じることができる。

外部と内部の造りの違いが鮮明で、その対比が実に面白く分かり易い。中世ヨーロッパの諸侯の置かれた立場が理解できる。



実在したヴラド3世は「串刺し公」と呼ばれていた。それはオスマン帝国の兵士が付けたあだ名である。

彼はオスマン帝国との戦いで手持ちの軍勢が少ないながらも大挙して押し寄せるオスマン帝国の兵を撃退し続ける。しかしそれでもオスマン帝国が矛先を緩めないでオスマン兵の士気を失わせるために捕虜にしたオスマン兵を裸にして身体ごと串刺しにした。したたる血と無残な姿をさらして見せしめにした。この残忍さから串刺し公と呼ばれるようになった。

そのような事情からルーマニアではヴラド3世は英雄扱いされている。ところがその彼をモデルにした小説は吸血鬼だからややこしい、いやかえって面白いかもしれない。

いやひょっとしたらルーマニア人は吸血鬼の方も心のどこかで応援しているのかも知れない。

■ブラショフ散策

ブラショフはルーマニアのほぼ中央に位置しルーマニア観光の拠点で人口は約32万人だ。時計台の旧市庁舎がある大きな広場を中心に街が広がっており、広場の近くには大学があるので若者も多く活気がある。



ブラショフは中世ルーマニアの歴史を色濃く残す美しい街だ。

そのルーマニアの歴史を少し紐解くと、ブルガリアによく似ている。常に強国のローマ帝国、オスマン帝国、ロシア（ソビエト連邦）に支配されていた。異なる点は隣国のブルガリアやハンガリーにも支配された。このような支配され続く歴史は私たち日本人にはとても想像できない。

私はあの勉強熱心なブルガリア人ガイドに彼の歴史観を聞いておけば良かったと後悔している。

自由時間を利用して私たち夫婦はいくつか観光名所を見て回り、最後にスフォリー・ストリートというヨーロッパで3番目に狭いという通りに行こうとするがなかなか見つからない。

地図にあるべき場所には道が通っていない。困ったあげく地元のおばさんに聞くが英語も通じず、けんもほろろに断られる。学生風の若者グループがいたので気を取り直して訊ねると最初は分からないと返ってきたが、ひとりの女の子が知っているというので親切に教えてくれた。

彼女に教えてもらったとおりに行くと簡単にたどり着くことができた。

そして分かったことはガイドブックの地図が間違っていることで、これではお手上げだ。しかし地元の人と接触するという旅の原点に立ち返ったことが功を奏した。

ようやく見つけたスフォーリー・ストリートは、建物と建物の間のただの狭い路地だ。この路地のためにいろいろ探し回ったとは・・・、どっと疲れが出る。

やはり旅は「期待と落胆」か。

■ペレシュ城

ブラショフの南にシナイアという高原リゾート地がある。ここはホテルや別荘が多くあり、日本でいえば旧軽井沢や箱根のような雰囲気を出している。

そのシナイアにあるペレシュ城はヨーロッパで一番綺麗な城だという。綺麗な外観をしているので結婚式の写真撮りに来ている花嫁もいる。



■社会主義が残したもの

ルーマニアで有名な人物を3人あげるとすれば「ドラキュラ」、女子体操の「コマネチ」、そして「チャウシュスク元大統領」だろう。

チャウシュスクは悪名高き大統領で、第二次世界大戦後に政権を握ると国民を圧政で押さえつけ自分の富を築いていった。ソビエト連邦崩壊に連動して政権が国民の力で倒され、大統領夫妻が捉えられて国民に処刑されるテレビ映像はあまりにもショッキングで、現代でもそんなことが起こるのかと私に脳裏に未だ残っている。

圧政は国民から自由も文化も奪った。

何しろ小説「ドラキュラ」がルーマニア語に初めて翻訳されたのはその圧政が終わった翌年の1990年であり、それまでは原作小説はルーマニアでは発禁書だった。その理由は私には分からない。自国を舞台にして世界的に有名にした小説がどうしていけないのか。

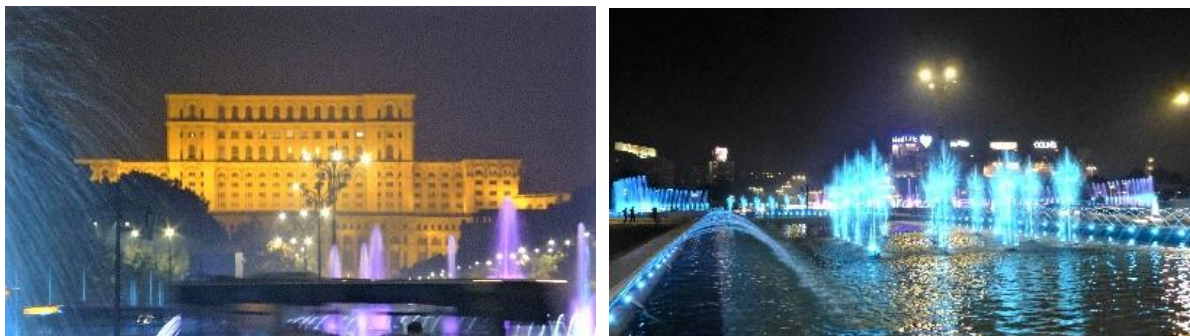
国民が貧困であえいでいたのに多額の税金をつぎ込んで作った宮殿「国民の館」は世界で二番目に大きな建物で、現在はルーマニア議会なども入り観光名所にもなっている。地上10階、地下4階、部屋数は3100以上もある。高さ84m、横幅275mもあって、全景をカメラに収めるのにも苦勞する。ちなみに世界で一番大きい建物はアメリカ合衆国の国防総省ペンタゴンだ。

ルーマニアの首都ブカレストには、国民の館の他にも旧共産党本部、噴水がたくさんある統一広場など社会主義時代の名残が多くある。そしてこの街は花の都パリをモデルに造られたものも多くあり、凱旋門しかり、シャンゼリゼ通りを模した統一大通りがある。

私たちが訪れたのは夜で、残念ながら時間の制約もあってゆっくり散策とはいかないが、社会主義時代の建物を見ることができた。

人類の夢の跡という意味では、私にはこれらの建物はローマ帝国やオスマン帝国の遺跡と同じように映る。

写真の左は国民の館、右は統一広場である。



共産主義は人類の壮大な実験と呼ばれているが、この共産主義についてもやはり元はドイツだ。マルクス経済学を唱えたドイツ人のカール・マルクスは人類社会の進化は、経済資本が王侯貴族などの特権階級から資本家へ移行し、そして最終的には労働者に移行すると考えた。

共産主義と社会主義を混同している人が多いが、共産主義とは究極のユートピア状態で、経済資本などが最終的に労働者のものになった状態をいう。社会主義はその移行過程で、経済資本は労働者ではなく国家が管理する。

その国家管理から段階的に国家という枠組みを取り去るはずであったが、社会主義の途中でソビエト連邦が崩壊する。中国は共産党という独裁体制を維持したままマルクス経済を捨てて、資本主義経済になった。

結局、人類はマルクスが考えたようにはならなかった。

なぜそうならなかったのか。

今回の旅行に来る前は、人間には競争が必要だとか、資本主義との争いに負けたとか考えていたが、旅行に来てから少し考えが変わった。

そういう理由もあるが、それよりも小説ドラキュラをも発禁にしたように自由や文化を奪っては、国民はついてこないだろう。

第四章 旅のおわりに

■ ドーハ空港にて

帰途のドーハ空港で見たことがある人と出会う。実は往きのドーハでも会っており、偶然にしても往復ともに出会うとは極めて珍しい。

その人とはピースボートの船旅で地球一周、オセアニアクルーズで一緒になった人だが、言葉を交わしたことがない。ただお互いに顔を知っているので何となく目が合って話始める。

彼とその奥さんはウクライナに行ってきたという。船旅を卒業してここ2年くらいは月に1回の割合で海外へのバック・ツアーで世界75カ国を回っているという。

私が彼に今までの旅のことを聞くと、彼は世界地図帳と日本地図帳を取り出した。そこには今までに行った場所やルートが細かく書かれている。世界地図帳には私が行ったことがある場所はほとんどマークされており負けている。日本地図帳はいい勝負をしている。

おっと、そんなことで勝負してもしょうがないか。

しかしこの地図帳への旅行履歴記入は非常に分かり易くて面白い。それを旅行に持ち歩くところがまた凄い。

そんな彼に私が「ウクライナはどうでした？」と質問する。

彼は「教会と修道院ばかりだったよ」と少しつまらなそうにポツリと言った。その言葉が私の心に微妙な一石を投げかけた。

それは今回私たちが行ってきたブルガリア、ルーマニアも似たようなもので、教会と修道院が多い。そういえばバルト三国もそんな感じだったことを思い出す。

私が旅の講演をする時には、旅は従来の観光型からこれからは体験型だと常々言っている。その方がより感動を得られるからだ。

今回のブルガリア、ルーマニアの旅は明らかに観光型で、体験型ではない。

では感動がなかったのだろうか。

いや、そんなことはない。感動の連続だった。

私には旧社会主義圏の東ヨーロッパの国々は、中世ヨーロッパを肌で感じて多くの感動を得ることができた。恐らく私にとっては新鮮で、新しい感覚で常にワクワクして旅したからだろう。

その意味では神奈川県に住む私にとって鎌倉の寺社仏閣を見て回っても感動が少ないのは、慣れてしまっているからだろう。

ということは、このまま同じような地域を選んで旅していれば、新鮮さが無くなり彼のような言葉が出てくるのかもしれない。

そんなことを考えると次の旅の候補地がおのずと決まってくる。

■旅の記録

実施は2019年10月22日（火）～10月29日（火）の7泊8日である。その行程の詳細を以下に記す。

- 1日目夜、成田空港からカタール航空でドーハ経由ブルガリアのソフィアへ
- 2日目早朝、ソフィアに到着（所要時間は乗り継ぎ時間も含め約20時間）
ソフィア市内観光（アレクサンドル・ネスキュー寺院、聖ソフィア教会、大統領官邸、
聖ゲオルギ教会、聖ペトカ地下教会、聖ニコライ・ロシア教会、セントラル市場）
- 3日目朝バスにてリラの僧院へ、再びバスにてボヤナ教会へ
- 4日目朝バスにてプロブディフへ、市内散策
昼からバスにてカザンラクへ、トラキア人の古墳（レプリカ）、バラの土産店
その後ヴェリコ・タルノヴォへ、市内散策
- 5日目朝バスにて市内の要塞に見える丘へ、その後バスにてイワノボの岩窟教会へ
- 6日目朝バスにてシギショアラへ、旧市街地散策、時計台登頂、山の上の教会、
ドラキュラのレストランにて昼食後バスでブラショフへ、ブラショフ旧市街散策
（黒の教会、聖ニコライ協会、スフォリー・ストリート）
- 7日目朝バスにてブラン城へ、見学後バスにてシナイアで昼食後にペレシュ城、シナイア僧院
バスにてブカレストへ、凱旋門、旧共産党本部、クレツレスク教会、統一広場、
国民の館、旧市街の一部散策、その後バスで空港へ
夜遅くカタール航空でドーハへ
- 8日目早朝ドーハ着、乗り継いで夜遅く羽田空港着（乗り継ぎ時間含め約18時間）

全て含めた総費用は2人で約45万円になる。ツアー代金は一人あたり約21万円で、詳細は以下に示す。

阪急交通社に事前に払ったツアー代金（2人分）	420040円
土産物、飲食代（2人分）	約19000円
国内交通費（自宅→成田、羽田→自宅 2人分）	約6000円